

この文書の内容の初出は 2009 年の

(財)大阪市人権協会／大阪市立浅香人研文化センター 編集・発行

人権啓発誌『跡地発』の、2009 年 9 月号(Vol.41)

連載コーナー“十人十色の人権問題”の#32 です

この文書は、佐倉ジェンダー研究所w e bのコンテンツの一部となっています。

<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/mermaid.top.htm>

(「桜色の虹は社会学の夢を見るか」のコーナー)

<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/SociologyCbRw.top.htm>

佐倉智美

Copyright Tomomi Sakura since 1998.

## 【跡地発・十人十色の人権問題】

社会生活を原則ほぼすべて女性として過ごすようになって、はや10年以上になる。それ以前は悶々としつつもフツーに男性として生き、それが行き詰ったときも、はたして“性別を変える”なんてことが可能なものなのか、先行きははなはだ不透明だったことを思い返すと、いやはや、その気になって進めてみれば、まだまだ課題も多いものの、じつはけっこうなんとかなるものである。今では「いわゆる性同一性障害っていうアレなんです」とでも言えば、大方の人には納得してもらえるので、時代は変わったと言ってよいのかもしれない。

とはいえ誤解、というか類型的な理解もまた、いまだ少なくはない。例えば「性同一性障害」という言い回しを真に受けて、それをあくまでも特殊な病気ととらえる向き。いや、こちらとしては、単に自らの好みや適性に沿った人生を希求し、実践しているだけなのだが（ようするに、それを妨げている性別という名のベルリンの壁さえ崩壊すれば、じつは何も問題のないこと）。そして最も閉口するのが、恋愛対象を勝手に推定されること。つまり、かつて男性だったのにわざわざ女性になったということは、恋愛対象は男性にちがいない！ という短絡である。残念ながら（？）私の恋愛対象は、仮に世間基準で単純化して「男か女か」で答えるなら（もちろんそのように単純化しない説明もまた重要なのだが、ここでは便宜上）、答えは「女」となる。自分自身がどうありたいかと、恋愛対象としてどんな相手が好みのタイプなのかは、まったくの別問題として独立した事象。そう考えればハナシは簡単なのに、どうやら世間には、恋愛は「男女」間でおこなうもの、そして「男女」が出会えば恋愛が始まるものという、確固たる信念が流布しているようなのだ。

だからこそテレビドラマで新番組が始まるたびに、主人公らの恋の行方が注目され、そしてその繰り返しがまた、「男女」の恋愛こそが価値あるものでありスバラシイという通念を世間に再生産している。アニメ映画『崖の上のポニョ』でも、魚を——そもそも魚類の性別というのはヒトが考えるほど厳密には決まっていないこともある——擬人化したキャラクターにまで性別が付与され、あまつさえポニョを女の子とすることで、男の子の宗介との間に観客が「男女」の物語を見立てることを可能なつくりにしてあるのは、そうした“異性愛物語”至上主義に他ならないのではないかと。これらが特定の基準にあてはまらない人への抑圧となっているのは想像に難くない。“異性愛物語”に適応できないことは不幸であり、劣ったものとみなされるルールの下に置かれていると言ってもよいだろう。よくよく考えれば少なくとも『ポニョ』の物語は、べつにポニョが男の子でも成立するのである。……え？ いや個人的には、ポニョも宗介も女の子！ のほうが萌えるんですけどネ♪

ともあれ、「男女」の恋愛以外のさまざまなパターンの人間関係が描かれる世界のほうが、そして「男女」の在り方自体がもっと多様に認められる世の中のほうが、今よりずっと豊かな社会だと言えるのではないだろうか。